

『前十字靭帯損傷患者と非損傷患者の大腿骨顆間窩幅の比較』

矢頭 透¹⁾ 湯朝 友基²⁾ 張 敬範²⁾ 江本 玄²⁾

1) 江本ニーアンドスポーツクリニック リハビリテーション部

2) 江本ニーアンドスポーツクリニック 整形外科

『はじめに』

前十字靭帯（以下 ACL）損傷は膝靭帯損傷の中でも頻度が高い外傷であり、ジャンプの着地や急な方向転換など、他者と接触しない減速動作により損傷しやすい。

今回、当院を受診した ACL 損傷患者と非損傷患者の大腿骨顆間窩幅（NW）と関節弛緩性（以下 GJL）に着目し、比較検討を行なった。

『対象』

非接触型損傷で ACL 再建術を施行した 100 例 100 膝（以下 A 群）。

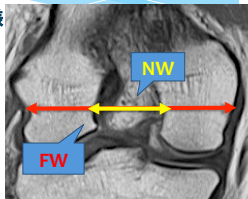
ACL 非損傷群 100 例 100 膝（以下 B 群）。

年齢は 10 代に限定し、男女 50 膝ずつを無作為に抽出した。

『方法』

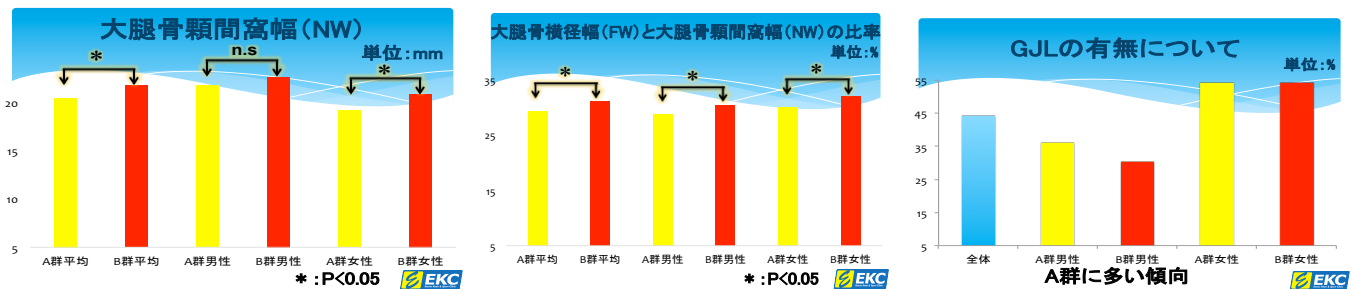
大腿骨横径幅(以下FW)と大腿骨顆間窩幅(NW)は、CT撮影や顆間窩撮影での評価が一般的。

NWをMRIにて膝窩筋溝レベルで測定し、先行研究と同様の結果が得られるか比較検討を行った。



統計学的処理は対応のない検定で算出。 EKC

『結果』



『考察』

B.Sonnery ら

大腿骨顆間窩幅が狭い事は ACL 損傷のリスクファクターである。

(J Bone Joint Surg Br 2011;93-B)

Williams ら

4 年間の調査では、顆間窩幅の狭小は ACL 損傷発生の危険因子。

(Am J Sports Med 2003:31)

Azzopardi ら

ACL 損傷症例は全身関節弛緩性を有する症例が多い。

(J Bone Joint Surg Br 2005;87)

先行研究と同様の結果であった。先行研究では CT 撮影や顆間窩撮影で評価していたが、MRI での評価でも同様の結果が得られた。

Lombardo ら

11 年間の X 線顆間窩撮影の調査では、ACL 損傷群と非損傷群では有意差はない。

(Am J Sports Med 2005;33)

他の因子を含め、追跡調査が必要である。

『Limitation』

CT 撮影や顆間窩撮影との比較を行っていない。

年齢を 10 代に限定したこと。

身長や体格差を考慮していない。

手術をした全患者を対象としていない。

『まとめ』

ACL 損傷群と非損傷群に関連する調査を行なった。

A 群の NW は B 群と比較して狭い傾向にあった。

MRI での評価でも、CT 撮影や顆間窩撮影と同様の結果を得た。

